

## 七転八倒！わたしのオーストラリア生活 11 年奮闘記／埼玉育ちのグローバル人編

四字熟語で『鶏口牛後』というのがある。

漢文の授業で習った方も多いと思うが、僕は『長い物に巻かれて良心や情熱を押し殺すような保身的な自分ではなく、正直かつ信念を持って行動できる自分であるべき』と勝手な解釈ではあるが、そう自分に言い聞かせている。

オーストラリアに居た頃、相手の気分を前向きにさせたい時の会話として『グラスに水が半分あるとして、君なら「半分も a half full」と思うか？それとも「半分しか a half empty」と思うか？』といった常套句を何度となく耳にした。

また、相手を励ます『たぶん大丈夫 Should be OK または you will be all right』というフレーズも耳馴染みの表現だ。

大丈夫だと思う根拠は皆無であっても、不安に押しつぶされそうな時にそう言われると、背中を押されているようで励みになるものだ。

何かに向かって挑戦する人に対し、仮に上手くいく確率が 50%でも、僕もオーストラリア人のように『大丈夫だよ』と言うことにしている。

何かに向かって挑戦する相手に『そんなの無理だよ』と言う人…

新たな一步を踏み出したものの、期待したほどの成果が得られない相手に『それ、見たことか』と嘲笑する人…

逆に上手くいった場合は『オレもやっていればよかった』等と言う人は少なくない。

成功か？失敗か？結果はやってみなければ解らないが、少なくとも挑戦しなければ良い結果など出るはずがない。

日本では『出る杭は打たれる』と言うように変化や異質なものに対してはあまり寛容で無いところが見られるが、グローバルな視点で言えば、日本は自らの『のびしろ』を摘んでいるように思えて仕方がない。

たとえ本国では上手くいかなくとも、海外では上手くいくという事例は多々ある。

例えば、オーストラリア（あるいはパースだけか？）に移って驚いた日本食店メニューに『テリヤキ・チキン』がある。

鶏肉を甘辛い醤油タレで絡めたもの（ブリの照り焼きとは大きく異なる）で、どの日本食店に行っても必ず置いてあると思えるほどの定番メニューだが、日本では思いも因らない商品がヒットする一例ではないか。

また、日本ではどちらかといえばマイナーなスバル（富士重工業）だが、ラリー（カーレース）人気より、インプレッサ（特にWRCワールドラリーチャンピオンシップ仕様）は超人気車種で、日本よりもオーストラリアの方が良く見かけると、スバルの方々も驚いていたほどだ。（参考までに <http://www.geocities.jp/takatsukayuichi/janewsrally.jpg>）

更に余談ながら、僕が豪州在住当時に使っていた洗濯機は、パソコンでは有名だが白物家電ではマイナーなNEC製だったし、オーストラリアのテレビCMでは同じくコンピューターの印象が強い富士通がエアコンを宣伝していた。

このような日本では想像もできないような活躍を果たしている企業はきっと多いに違いない。

ただ一つ言える事は、人でもモノでも『世界で通用するのか？』『日本でしか通用しないのか？』は日本の外に出て挑戦するまでは解らないということだ。

だからこそ、とりわけグローバル人材を目指す方々には、是非とも海外へ飛び出し、日本や自分自身のことを客観的に見る経験を積んで欲しい。

いつの時代も年配の方々には若輩者について『今の若い者は…』と嘆くようだが、僕はオーストラリアで見てきた日本人ワーホリ（ワーキングホリデービザで滞在する長期滞在者）を例に、

『ある若者は炎天下の農場で、監視の目を盗んでは怠ける他国人をよそに、最後まで実直に野菜の収穫に精を出し、

また別の若者は閑散としている午後のショッピングセンター内のフードコートで、店頭で談笑に夢中な地元店員達の傍ら、黙々とショーウィンドウを磨く、

そんな日本の若者の姿を何度も目の当たりにしてきた。』と言い返している。

日本人に受け継がれる『勤勉さ』は日本が誇る豊富な資源であり、日本の若者がますます世界へ挑戦し、グローバル社会で活躍することこそ、将来の国益に繋がるのではないだろうか。

本稿では『七転八倒』と記述している通り、僕の人生には浮き沈みが多い。それゆえ『色々な仕事をしてきたみたいだね』と良くも悪くも他人から言われる。

僕のキャリアは新聞配達奨学生に始まり、イタリア料理店では料理人見習いだけでなくウェイターやバーテンダー業務を…、

ホテルではウェイターやコンシェルジュ、そして総領事館や外務省の職員、政治家秘書、外国政府機関職員等を経験してきた。

決して欲張りでも飽きっぽい訳でもなく、ましてや『甘い汁』を求めて渡り歩いた訳でもない。

振り返れば『不器用で要領が悪いながらも、コツコツと積み重ね、一定の評価を貰えるようになると、新たに着任した利己的な輩に目をつけられ、上からグシャッと潰される』というパターンを繰り返しているように思う。

一方、何とか食い繋ごうと新たな挑戦を繰り返した為だろうか、本業もさることながら、オーストラリアではラジオのレポーター (<http://www.youtube.com/watch?v=6sNnIVMcdkw>)、ラリーチームのアシスタント (<http://www.geocities.jp/takatsukayuichi/janewsrally.jpg>) 等を…、

帰国後は、オーストラリアの政治 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008674221>) や障害者雇用支援コミュニティビジネス (<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000240122623>) に関する研究論文の発表や、埼玉大学における豪州の食育に関するプレゼンテーションや、グローバル人材に関連した講演の機会など、思いも因らない分野に挑戦する機会にも恵まれた。

ビジネスで成功を修める秘訣は知らないけれど、僕には潰されても尚しぶとく這い上る『しぶとさ』と、未知の分野に挑戦する『チャレンジ精神』が身に就いたらしい。

これもスーツケース2つ分の荷物だけで単身渡豪し、11年半揉まれてきた成果なのだろう。

2010年10月にオーストラリアから埼玉県へ帰郷後、『さいたま日豪協会』を立ち上げた。

日本とオーストラリアの友好親善に寄与したいとの思いは当然ながら、かつての自分と同様に『海外に挑む人達を応援したい』というのが真の目的だ。

11年半オーストラリアで積み重ねた経験こそ僕の財産であり、かつての自分のように『新たな一步を踏み出したい人達の背中を押してあげること』が僕にできる最高の社会貢献であると考えている。

さいたま日豪協会は協会と名乗っているものの会員を抱える団体ではない。

団体の運営には時間と仲間と労力を要するが、一つでも要素が欠けるために活動ができないようでは本末転倒だ。

とりわけ現役世代は自由な時間が限られる。  
だからと言って、『何もしない』のは僕らしくない。



例え一人でできる小さな活動であっても、それを積み重ねるよう心掛けている。

そして、大きなイベントへ参加する時には仲間を募り、逆に支援を求められた時は喜んで協力する。

持ちつ持たれつ、様々な人々と交わるで、思いも因らない新たな輪が広がった。

特別な機会ではあったが、ミラー駐日大使や訪日中のアボット首相といったオーストラリアを代表する方々と言葉を交わす機会まで頂戴した。

今後も思いも因らない素晴らしい機会が僕を待っているだろう。

是非とも、素晴らしい経験より学んだことを社会に還元したい。  
だからこそ、僕は『埼玉育ちのグローバル人』として、これからも多くの人達を応援する。